

忘れやしない、…黙ってないわよ！

(¡Ni Olvido, Ni Silencio!)

岡野内 正

<良心の法廷>

グアテマラ全土から集まったマヤ系先住諸民族の女性たち。話すことばもかなりちがうし、すてきな伝統衣装や髪飾りなどは、村ごとに違うという。いつも同じ衣装の小グループではぐれないように行列をつくっているおばさまたちの後ろについて、バスを降り、古いどっしりとした大学の講堂にぞろぞろ。…同じ部屋に泊まったおじさんたちは、二階席へ。おばさまたちは、前のほうからぎっしりと詰めて座り、見る間に講堂がいっぱいになる。いろんな服装の一般のひともあり。最前列あたりは、国際 NGO 関係や海外ゲスト。背広やスーツの人たちも。私たち日本勢 5 人は、演壇に向かって右手あたりに陣取る。すぐ後ろには地元の女子学生たちの一団も。「内戦中の女性への性暴力に対する良心の法廷 (Tribunal de Conciencia contra la Violencia Sexual hacia las Mujeres durante el Conflicto Armado Interno)」というのが正式名称だ。

<忘れやしない、…黙ってないわよ！>

一連の挨拶や開会セレモニーが終わり、おばさまたちが語り始めた。…内戦、というより政府軍の反政府ゲリラ掃討作戦に名を借りた先住民虐殺の激しかった奥地の村から、ひとり、またひとり。壇上の白いカーテンに囲まれた証言席から、先住民のことば。そばに座る通訳スタッフがスペイン語に訳す。それはすぐさま同時通訳の機器を通じて、4つの主要なマヤ民族系諸言語と英語に訳されて、そもそもスペイン語を学ぶ機会のなかった先住民族のおばさまたち、さらに私のようにスペイン語のあやしい外国人のレシーバーに伝えられる。…30年の月日を超える痛みの息遣い。おばさまたちが語ることばは、すぐにはわからない。でも、苦しみだけは、すぐに伝わってきて、会場が息を呑む。…虐殺の記憶の掘り起こしと、責任者の処罰、被害者への補償を通じて、社会の再建を訴えてきたヘラルディ司教が 1998 年に暗殺されて以来、あいまいにされてきたグアテマラ虐殺の記憶が再び、おおやけの場で語られた瞬間。

<グアテマラ？>

ゼミの学生といっしょに沖縄に飛び、普天間、嘉手納、辺野古から高江を訪ね、卒業生を頼って青森へ、吹雪の六ヶ所村原子力燃料センターを訪ね、学内の有機農業畑の学生たちと神戸の有機農業国際シンポへ、…。多忙な二月のさ

なかに、先住民運動のニュースに入っていた、国際民衆法廷への協力の訴えが目にとまった。…大虐殺の張本人が処罰されずに国会議長になっていたこと。日本の「従軍慰安婦」問題の国際民衆法廷に触発された先住民の被害者女性の訴えから始まったこと。ようやく開催までこぎつけたのに国立劇場を貸さないなどの妨害を受けていること。外国からの傍聴人が少ないと、証言に立った女性たちが迫害を受ける可能性があること。…グアテマラ虐殺や現在の政治情勢への正確な知識はなかったが、フィリピンのミンダナオでの経験から、虐殺に慣れた軍部が何をするかは、わかる。これを書いている今でさえ、無残にも殺された NGO や民衆組織の知人、友人たち、神父のことを思うと、涙があふれてくる。…ベーシック・インカム導入実験をやったナミビア村落の調査旅行が延期になったことをゼミ生に確認して、即刻、申し込み。

#### <虐殺の記憶>

岩波書店から出版された、殺されたヘラルディ司教たちのプロジェクトの報告書の抄訳。ほぼ 10 年前に購入したまま、ほとんど目を通していなかったものを引っ張り出し、吸い込まれるように読んだ。…性暴力のくだりは特に凄惨で、素朴な語り口の被害者、加害者の証言を読み進めるうちに、暴力の記憶が自分の中に染みわたってくる。自分も男なのだけど、男っていうものに気持ち悪くなる。トラウマっていうか。…しかし、分析はみごとだ。…なるほど、性暴力も殺害も、軍部の権力を維持するために、戦略的、組織的に用いられている。しかも、そのために、先住民の若者を動員して、洗脳訓練をほどこし、殺人・性暴力マシーンを作りあげている。…一度作られた暴力マシーンは、民政移管、内戦終結（反政府ゲリラ勢力と政府との和平協定）後も、ばらばらの部品のままで作動を続ける。

#### <今も続く暴力>

現在でも、グアテマラでの女性への暴力は、格段に多く、残虐だという。今回の「良心の法廷」は、そんな暴力の文化を変えていくことを社会にアピールする意味もある。まずは、女性たちが立ち上がって、叫ぶ。「忘れやしない、黙ってないわよ！」

そんな主催者側の女性団体のキャンペーンもあつてか、会場には、マヤ民族の衣装を着ていない西欧系の雰囲気若い女性たちもちらほら。斜め後ろにいたお姉さんは、特に被害者の女性の証言には、いすから立ち上がって、熱烈な拍手。休憩時間になって、ちらと目が合うと、向こうから近寄ってきて、ひととおりの挨拶。「この社会では、ほんとうに画期的なことなの。被害者女性が声を上げないと、だめなの！しかも、先住民たちが！すごいわ！」

### <反政府運動への暴力>

奥地の先住民女性たちは、反政府ゲリラをかくまうかも、という容疑だけで、性暴力と虐殺にさらされた。しかし、反政府ゲリラなら何をしてもいいというわけではない。アメリカ独立戦争が、ベトナム戦争がそうであったように、人には自分の国の政府を、必要ならば武器をとってでも、変える権利がある。そして、戦闘にもルールがある。非戦闘員を殺さない、拷問をしない…等等。

「良心の法廷」には、ゲリラ戦闘員ではなかったが、当時は学生として、反政府運動に参加し、軍事政権から拷問と性暴力を受けた女性も証言した。白いカーテンの向こうではなく、壇上に姿をさらして、雄弁な活動家らしいスペイン語の証言に会場は沸いた。

### <なぜ、「良心の法廷」なのか？>

国際法は、カトリックの宗教改革をめぐる残虐なヨーロッパの宗教戦争（いくぶんかは、グアテマラを含むラテンアメリカで同時期に進められた先住民大虐殺も！）の体験を踏まえた法学者たちの大論争を経て、19世紀はじめには、「文明的な戦争」のルールを確立。それから世界分割の植民地獲得（先住民虐殺の戦争）と再分割という二度の大戦を経て、「人道に対する罪（**Crime against Humanity**）」なんて概念が誕生。不遑及の原則だの時効だの近代刑法思想に縛られずに、…あんまりひどいことをやったひとたちを、そのままにしておく、またやっちゃえ、っていうことになるよね。悪い子がでてきたら、また連合軍のような力でやっつけければいい、というのではなくて、ルールとして、人類みんなでもうやらない、やらせない、っていう気風っていうか、文化をつくるために、けじめをつけていって、国際社会ってゆうか全人類にとって法といえるものを創っていこうよ、と。ナチスの罪はこれで裁かれ、旧ユーゴやルワンダの虐殺もこれで。21世紀に入るところから、奴隷貿易の罪や、そもそもアフリカを植民地にしたり、先住民を侵略したりって、人道に対する罪じゃん、という議論が国連でも。

### <ふがない政府…国民？>

性的な奴隷制（**Sexual Slavery**）と国連の人権委員会あたりで呼ばれる「従軍慰安婦」制度の被害について、裁判所が時効だの理由で門前払いし、国会も新しい法律を作らず、行政は、見舞金でごまかし、いまさらもういいじゃん、という国民もかなりいたり、…いまだまともな調査・処罰・補償ができていない国、日本では、国際法学者たちと、国際人権 NGO、そしてなによりも世界中の被害者たちが協力して、国際民衆法廷をやった。それと同じで、グアテマラ

でも「良心の法廷」になったのは、ふがない政府のせい。グアテマラの政治では、すでに軍部がふたたび独裁を、という雰囲気にはないらしい。だが、かつての反政府運動に加わった人々が、裁判所、国会、行政府を刷新できるほどの力はない。その結果、軍を出たかつての虐殺者たちが、羊の毛皮をかぶってさまざまな政党をつくり、めえめえと自由を謳歌する、あやうい自由。日々の糧を得るのに忙しい国民は、そんなめえめえの声に、つついぞろぞろついていたり。…軍政時代からの反政府・民主化運動の闘士たちは、人口の半分以上を占めるといわれるマヤ系先住民族、その被害者の女性たちとつながり、グアテマラ社会を底辺からゆさぶりたかったのではないかしら。都市の被害者が先住民女性の被害者の話を聞くのが初めてなら、先住民女性被害者たちが都市の自分たちの言語での同時通訳で、被害者の肉声を聞くのも初めてではないか。

#### <二日目の法廷>

二日目の法廷は、専門家の証言。ちょうど国外から参加の国際法専門家の証言のとき。最前列あたりに陣取っていると、ちょっとフォーマルな感じのスーツを着込んだお姉さまが、隣で、しきりにメモを取る。メモを取るつぼが、まるで専門学会にまじめに出たときの私たちのように、論拠の条約や文献の出典などに集中する。休憩時間になったとたんに、顔を見合わせちゃったので挨拶すれば、なんと、控訴院の判事の名刺をくれる。うーん、こういうひとたちも、参加して、すこしでもすてきな判決を出してくれるようになれば、うれしいのだけれど。

#### <専門家たち>

外国人はともかく、こんな法廷に出てきて、しっかり証言する地元のひとは、なかなか腹の据わった専門家たち。ひたすら虐殺死体を発掘し、検視をやっているおじさん。画像を見せながら、性暴力を物語る虐殺遺体の傷、不自然な着衣の状況など…。トラウマ後の心のケア専門家のお姉さん。…たまたま発見されて民間の手に渡った内戦時代の警察の秘密文書を分析して、拷問・虐殺を命令した人物名までも特定できる資料集を準備している歴史学者のお姉さん。…彼女とは、終了後の昼食会で隣になり、いろいろお話。…ずばり、軍や警察に狙われて、危なくない？などと聞けば、にっこりして、ほんとうは、あんな証言やったし、しばらくグアテマラを離れたほうがいいかも！と。一時期、脅迫を受けて、ほんとうに離れていたこともあったの、と。出身は外国だけど、もう20年以上も住んでいて、ほんと、偶然みつかっちゃったのよね、あの文書、という屈託のない顔に、不思議な迫力。…

### <傍聴人署名>

判決というか、宣言のようなものが出され、拍手で確認。ヘラルディ司教たちの「虐殺の記憶」報告の線を確認し、女性への性暴力を組織的な犯罪としてその罪を追及していこう、といった方向だったような。…最後は、国外からの傍聴人も含めて、次々に名前が読み上げられ、壇上にあがって、サインしていく。日本勢もひとりずつ。壇上に座る国外からのゲストの判事たち、ウガンダ、ペルーなどの闘う被害者代表の人々とも、拍手やキスを。…演壇上から見える、先住民のおばさまたちの、顔、顔、顔。法廷開始の二日前から教会の施設でいっしょに暮らし、食堂でメシの順番待ちでいっしょに並んだ顔、顔、顔。グアテマラ全土から集まったこのおばさまたちこそ、「良心の法廷」の宝。

### <クリントンとロックバンド>

終了後の昼食会では、外国人ゲストたちが、残念そうにメディアを語る。「クリントン国務長官の来訪と、有名な外国ロックバンドのコンサートの記事のせいで、ニュースから消えたね！」…われわれの法廷の記事は、ニュース欄ではなく、良心的な記者のいる新聞では、かろうじてコラム欄に載っただけだという。…クリントンには、要請してみたが、断られたという話も。内戦時の軍事独裁政権を支援したのは、アメリカ。民政移管とともに、アメリカの関与を認めて、謝罪したのは、当時のクリントン大統領だった。でもそれっきり。もし、この法廷に国務長官になった奥さんが現れなんぞすれば、ほんとすごいんだけど。…まあ、そうならないのが現実のアメリカ。「あやまってすむと思ってるの？

(Sorry is not enough)」っていう本の題名が頭に浮かぶ。最近あいついでアメリカの南部諸州で、過去の奴隷貿易と奴隷制について謝罪決議があがっているが、それに関して、さらに奴隷の子孫への補償を求める議論をまとめた本だ。

### <奥地へ>

昼食会をやった、富士山そっくりのすてきな火山のある古都から、日本勢だけで、さらに奥地へ。内戦時の被害を受けた先住民女性たちの草の根組織の現場へ。…いちばん深刻なのは、植民地時代さながらの巨大農園主の領地内で、自分の土地を要求したために、水がない土地に追いやられた先住民グループ。水汲みに毎日4時間。それでも、自分の土地がいい。昔の小作人だと、農園主が南部に持っているコーヒー園に出稼ぎにいかなければ暮らせない。いまなら、家族で暮らせる。でも、お金がないし、小学校も遠くなったので、子供を学校にやれない。そう、「進歩のための家族手当」なんて最近の政府が導入した貧困層の子供向けの手当でも、役所から無視されているのか、もらえるあてさえない。先住民組織も、教会も、なぜかいまでは支援してくれない。…え？ひどす

ぎない？どうすればいいのかしら？

<おばさまたちの元気>

とりあえずうまくいってるようなところもたくさん。日本の NGO からもらったお金で、トウモロコシの粉引き機械を購入し、共同管理。プールされた管理資金をネコババする人がいたり、共同財産の管理にからむいろんな問題を話しあいで解決してきた女性たちの、すごい迫力。一時間かけて険しい山道を登って訪ねた家まで、もっと山奥から一時間かけて降りてきたという。スペイン語だめなひとも多いけど、話し合いはきっちり。…いっしょにそんな草の根を回ったネットワーク組織女性の会の理事のおばさまたち。新しい貧困層向け家族手当をどう思う？なんて質問すれば、「とりあえず学校にいけない家庭の子にとってはいいいことよ！」と、しっかりした答えが返ってくる。それでも、女性の会に入るまでは、恥ずかしくて、人前で話すこともできなかった、と涙ぐむ。

<風景に埋め込まれた虐殺>

「あの教会が、村人が押し込められて、ずっと拷問され、殺されたところ。」奥地へ進むに連れ、日本勢のお姉さまから、そのころの話。「この丘は、マヤの聖地だけど、ほら、その石の十字架の後ろのあたり、あのへんに、マヤの司祭が、頭から埋められて、両足を空に突き刺すようにして殺されていたんだって。」その聖地で、この地域の女性の会の今後を祈願するマヤの儀式をやった。石造りで、すでに傾いた、苔むした十字架の前のちょっとした草地。地面に砂糖でマヤの絵文字を書き、その上にろうそく、先祖の霊にささげるチョコレートやパン、まわりには、色とりどりの花。そんな祭壇を囲んで、輪になって座るすてきな伝統衣装の先住民女性やこどもたち。私たちも含めて 30 人ほど。女性の会に入ってから、勉強して司祭になったという若い女性。若い夫がかいがいしく補佐を勤める。儀式の最中にケータイがなっても、あわてず騒がず、中断して出る。

<主の祈り>

…ゆったりと数時間かけて、ろうそくを投入し、聖水やらお供え物やらを祭壇にふりかけながら、すべて燃やし尽くす儀式。強烈な日差しを避けてまばらな木陰にうまく移動しつつ、足を投げ出したり、スイカやみかんを食べたり、みんなまったり。それでも要所要所のお祈りはきっちり。…ひざをついて立ち、頭をたれて目をつぶり、ぼそぼそつぶやく。「天にまします我らの父よ、…」なんてスペイン語が聞こえ、主の祈りかと思えば、いろんな聖人の名前やら、それに、スペイン語でも、ラテン語でもなく、マヤのことばみたい。…首都の聖

地でも、法廷の始まる前日にこの儀式をやり、同じ祈りが。…先住民女性の美しい伝統衣装と日に焼けた顔と、刻まれた深いしわ、そんなひとりひとりのつぶやきのような祈りが、ぶんぶんみつばちの群れから、鳥たちの羽音へ、ついに波のようになって天に昇っていく。素朴に美しいひとりひとりの顔。そこに刻まれた虐殺の日々、今日まで続く苦難に、思わず、ぐっと涙があふれてくる瞬間。

#### <抵抗の共同体>

奥地の町の修道院の先住民出身のシスター。すーっと、人の顔の奥にある魂、その奥につらなるたくさんの魂まで見つめてしまうような、黒い瞳のすてきなひと。「最初に森にいったときは、ほんとに食べるものがなくて、蛇でもごちそうだった。」1980年代から90年代初めまで、内戦で村を追われた人々が、森の奥深くに逃げ込んで、軍に見つからないように難民村を作って住んだ。抵抗の共同体と呼ばれるそんな密林の難民村に5年間もいっしょに住みこんで、教会の役割を勤めていたというひと。女性の会は、そんな難民村から帰還して、土地も財産も奪われて元の村に戻れず、再定住地で貧困にあえぐ女性たちを支援するために始まったものでもあったらしい。

「どうしてシスターになったのですか」なんて質問に、半生を語ってくれた。…貧しい先住民の娘はどこでもそうだったように、家事手伝いの女中として、首都へ出稼ぎに。たまたまであったすてきなシスターの援助で、学校にいけるようになり、勉強していろんなことがわかってきたときの悦び。他の先住民女性にも勉強させてあげたい、自分もそのシスターのようになりたい、と。思っ

#### <ダム、鉱山開発…>

その修道院には、教会系のさまざまなNGOのポスター。ダム建設による立ち退き問題、鉱山開発による環境破壊、立ち退き。…わあ、やっぱりここでも！…しかし、20万人が殺され、百五十万人が難民になり、百いくつの村が消された「内戦」。革命戦争ではないので、結局先住民は土地を取られたままさらに奥地に追いやられ、ようやく安住の地を、と思ったところで、さらに立ち退き話。しかも、あの虐殺が処罰されていないので、先住民の側は、虐殺の恐怖におびえたまま。…ごろつきをのさばらせたままにしておくと、開発に都合がいいのかも！自然資源が目的だと、人は邪魔だし。…これって、金山銀山砂糖畑で先住民を死ぬまでこきつかい、絶滅するとアフリカから奴隷を入れた500年前からのスペインのやり方とかかわらないのかも。

#### <聖職者は逃げてはいけない>

法廷期間中に宿泊した首都の教会施設の玄関あたりで、本を売っている。ついつい買ったのが、『聖書における土地のための闘争』。聖書のあっちこっちから、土地はみんなのものだって書いてあるぜ、というすてきな本。…カセットつきの平和の歌。機関銃から花が飛び出している。…殺されたヘラルディ司教の伝記。…『聖職者は逃げてはいけない (El Pastor No Debe Huir)』。これは、奥地のやはり富士山がダブルで湖畔に突っ立つすてきな村の神父の話。やはり殺された。先住民の伝統衣装の小さな女の子と手をつないでるひげのお兄さんの写真。うれしそうに見上げる女の子のあどけない顔。女の子をしっかりと見つめるやさしい目。そんな表紙を見てるだけで泣けてくるので、即購入。移民の子としてアメリカで生まれ、なんていう生い立ちから、まじ危険なので何とかしてくれ、なんていう殺される直前の手紙などが収録。…後で訪ねて一泊した湖畔の村の教会。内部正面左に、その神父の巨大なひげ面写真。彼が住んで、殺されたのは、その村だったらしい。

#### < 虐殺記念館 >

法廷の期間中に、首都の博物館で現代史の特別展を見た。証言と傍聴に全国から集まった先住民のおばさまたちといっしょ。そのうちの一室が、女性への暴力、もう一室が内戦。首都での反政府デモに、プラカードを持って機動隊と向き合う制服の女子高生たち。…そんな写真と、当時女子高生だった被害者の証言がかぶさって、ぐっときたり。しかし全体としては、いろいろあったけど、なかよくしようよ、っていう展示になってしまっているかも。…眼光鋭い案内のイケ面お兄さんは、大学院生でもあり、いやあ、当事者のひとがどう見てくれるか、いちばん緊張でした！などとかわゆいので、いやあ、いい仕事っすよ、と誉めたのだけど。

しかし、テーマを内戦中の虐殺にしぼった記念館はまだないらしい。火山の古都のはずれにある「父の記念館」がそれを目指している。すでにおばさまになってる娘さんが案内してくれる普通の家。昔、父が住んでいたところだ。父は、子供たちの詩集を出版した学校の教師。自身でも詩集や、先住民の母親から取材した物語を出版。父のベッド、本棚に蔵書、レコードなどもそのまま。父の衣服。卒業証書や家族写真、父と同じく、消された友人たちの写真。女優、作家、詩人たち。

#### < 甘いコーヒーの実 >

父は、突然、秘密警察に拉致され、消えた。死体はまだ見つからない。今年つい数週間前の新聞。首都の工事現場で、内戦時代に秘密警察が拉致、拷問し殺した死体を投げ込んだ穴が発見、という記事。丁寧に発掘するので時間がか

かるけど、ここにあるんじゃないか、と娘さん。大統領と娘さんが並んで立つ写真も。彼女は、父の失踪を米州機構の人権委員会に訴え、ついに民政移管後の大統領に初めて謝罪させたひと。…小さな庭にはコーヒーの木。赤い実が甘いので、子供のとき食べてはしかられて、…食べてみる？といわれて、口に含めば、ほんとうにほのかに甘い！種の部分を炒れば、りっぱなコーヒー豆。

#### <虐殺の記憶を音楽へ>

庭の小さな小屋は、おじいさんたちが住んでいた典型的なこの地域の先住民のもの。おばあさんたちの衣装の入っていた木の箱やら、石臼やら道具やら。…庭から母屋の別の部屋に入れば、おおきな木琴、マリンバがずらり。グアテマラ音楽には欠かせない楽器。…近所の子供たちを集めて、音楽教室やアート教室をやっている。虐殺記念館のようなものはこの国でも初めてだし、いろいろ妨害もあったの。近所の人も温かい眼ばかりじゃないわ。それに、虐殺のことを思うと、だれでも心が沈んでしまう。それじゃいけないと思うの。虐殺の記憶を抱きしめて、それを音楽にしながら、明日を生きる力にしていきたいの。子供たちにも、来る人たちにも、楽しいところ、元気のでるところにしていきたいの！

#### <元気の出るジェノサイド論>

ジェノサイド論という講義に出てきたという学生が言った。「興味あるんだけど、とにかく、くら一い雰囲気、…耐えられないから、やめちゃった。」「え、それやばいじゃん！…そのうち、わたしもやろうかな。元気の出るジェノサイド論。」「いいかも！」…そんな話を、現代思想や哲学の人たちと交流の深い文学の人に言えば、彼女、あたりを見回すと声を落として、「しーっ、そんなことを言うと、袋叩きに合うわよ！」

十数歳になる息子さんを難病で亡くし、首都から引き上げてきて、父の家に住み、地域の図書館で働きながら、父の記念館、虐殺記念館を造り続ける娘さん。父の虐殺の記憶と息子の死に苦しみながら、彼女がついにたどりついたのが、元気の出るジェノサイド記念館なのかも。…別れ際に、澄んだ黒い眼をみながら、ぎゅっと抱きしめてしまった。

#### <日本へ>

「まじ、へこんだし、しばらく、バスに乗れないっす。」古都の日本人のお兄さんの経営するペンションの客は、ほぼ日本人の長期滞在のバックパッカーばかり。もじゃもじゃ髪のお兄さんは、首都のターミナルで、古都行きのおんぼろバスに乗り込んだとたんに、銃声。あれ？と、音のした運転手のほうを見

れば、床に倒れた運転手の体の下から、真っ赤な血が、とめどなく…。呆然とするうちに、警察がやってきて、パスポートを控られたが、あとは、無我夢中で古都へ。新聞情報では、バス会社にうらみの犯行らしく、助手もいっしょに殺された。彼は、運転席から2, 3席後ろに座り、客はほかにいなかったというから、犯人の視野に入って、いっしょに殺されなかったのが奇跡に近い。

富士山の形の雄姿を正面に見る屋上の炊事場で自炊の人たちとたまって、よもやま話。法廷のこと、虐殺のこと、奥地の先住民のこと、いろいろ話して、その町の「父の記念館」を紹介する。

<世界へ>

見境なく、有機農業を勧める。毎週二千円でダンボール一箱のおまかせ野菜を受け取ってもらうでしょ、一月で八千円。三十人自分の畑のファンを作れば、二十四万円。化学肥料も農薬もなし、食費もほとんどいらぬし、まあ、暮らせるでしょ。…二年ほど研修生になってノウハウを覚えれば、土地を紹介してくれるし。新規就農講座にいったけど、まじ、楽しそうだったよ、みんな！…WWOOFなんてネットワークがあって、世界中の有機農場に行ったり、受け入れたりもできるし。新規就農のひと、ほとんど協力隊出身だったし。…

あとは多国籍企業をどうするか。世界中からお金をかき集めてくれるし、そこらごそっといただいて、全世界10億の栄養失調の人も含めて、全人類63億人もれなく個人向けにお金を配っちゃう。地球人手当、地球生活基本金とか言う。私の訳だけどね。計算した人がいて、そこそこ食える程度なら、毎月毎月配れちゃうんだよね。いまの多国籍企業はすごいよ。

<忘れやしない、黙ってないわよ！>

もちろん大事なものは、心の平和。お金の話し抜きはいんちきだから、はつきりさせたいだけ。スペイン人がやってきて虐殺を始め、500年の恨み。いや、先住民は天使だったなんていわないよ。マヤの人々の間にも残る、長年の戦争の恨み。男の暴力。…大事なことは、すべてを語りあうこと。おまんま稼ぐのに忙しいからあとで、なんていわないこと。だって、地球が熱くなって、ごみで汚れて、だめになるほど、モノを造りすぎちゃってるんだもの。人類ぜんたいで、今、ゆっくり休んで、じっくり話し合おうよ。ほんとの初めからの受け継がれてきた恨みと苦しみの声を聞こうよ。…

そんなことをあちこちでしゃべり、いま書いていて、…わお、締め切りすぎて、こんなものを書いている場合じゃないのだけど。(2010年4月16日)